

特集
地図
地図を通して眺める世界

Special Features
Map
Images of the world through the map

地図は語る
The map is presenting something

地図から読む国土の変遷

古い地図は、忘れられた歴史を語りかける

長岡正利

NAGAOKA Masatoshi

国土環境株式会社・管理本部部長
元国土地理院



1— 地図は語る— 東京湾岸の変遷

説明に先立って、まずは地図を見て頂くのが一番と考え、地形・土地利用の改変が著しい東京湾岸を例として、明治中期と現在の地図に見る景観を紹介する。図1と図2は20万分1地勢図、図4と図5は5万分1地形図であるが、ともに、明治期から継続的に全国にわたって作成されてきたので、国土の変遷を見る上での時系列的資料として重宝できる。なお、全国土を均一な精度で覆う最大縮尺の地図である2万5千分1地形図も一部地域については明治期から作成されてきたが、国土全体の完成は昭和58(1983)年であった。

地図から読みとることの出来る国土の変遷としては、かつての列島改造から全国総合開発の時代に手がけられた幹線交通網の建設状況のほか、各地での臨海工業地帯やニュータウンなどの都市化。一方では凋落の中で地図からも消えていった炭田地帯や鉱山町など、枚挙にいとまがない。ここでは、例示として東京湾岸と、西日本では京都盆地の南部を掲げる。

東京湾岸については、周知のことではあるが、地図に

も見るとおりその周縁のかなりにわたって埋立てが進められて、遠く隔たってしまった海岸線は垂直の護岸と化し、干潟などの自然の景観が見られる場所はあまりない。明治期(図1)においては、東京の前面を除けば、豊かな自然と共生し、江戸前の豊富な魚介類や海苔などに恵まれた美しい海辺であったことが、地図における美しい表現からも伺われる。

現在の東京湾岸に残る規模の大きな自然の干潟は、江戸川地先の三番瀬と千葉県小櫃川下流の盤洲干潟くらいである。かつては、ここに掲げた明治期の諸図に見事に描かれているように、全域にわたって遠浅の干潟が連なり、潮干狩りや海水浴などの楽しい場を提供していた海岸であった。

一方で開発側から見れば、このような遠浅の海岸は埋立てが容易であり、東京大都市圏の拡張には格好の場であったことから、人口増加・産業活動の活発化とともにたちまちに埋立てが進んだ。明治5(1872)年に、新橋・横浜間に最初の鉄道が敷かれた頃には、線路の一部は遙か彼方に品川のお台場を望む海上に盛土されて開通



■図1—20万分1帝国図「東京」(1921年修正、陸地測量部)、×0.85
明治20年代以来の月島埋立地が見える程度。荒川は隅田川として東京湾に注ぎ、江戸川末端の三角洲地形が見事。幕末に築造されたお台場は、まだ遙か海上に



■図2—現在の20万分1地勢図「東京」(1997年修正、国土地理院)、×0.85
東京湾岸道路などの幹線交通路が完成し、東京ディズニーランドも見える。その外側でも都市化が進行中で、図の範囲では自然海浜といえる場所はない

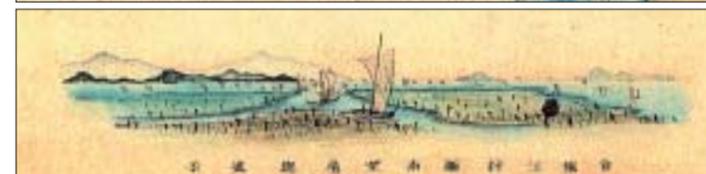
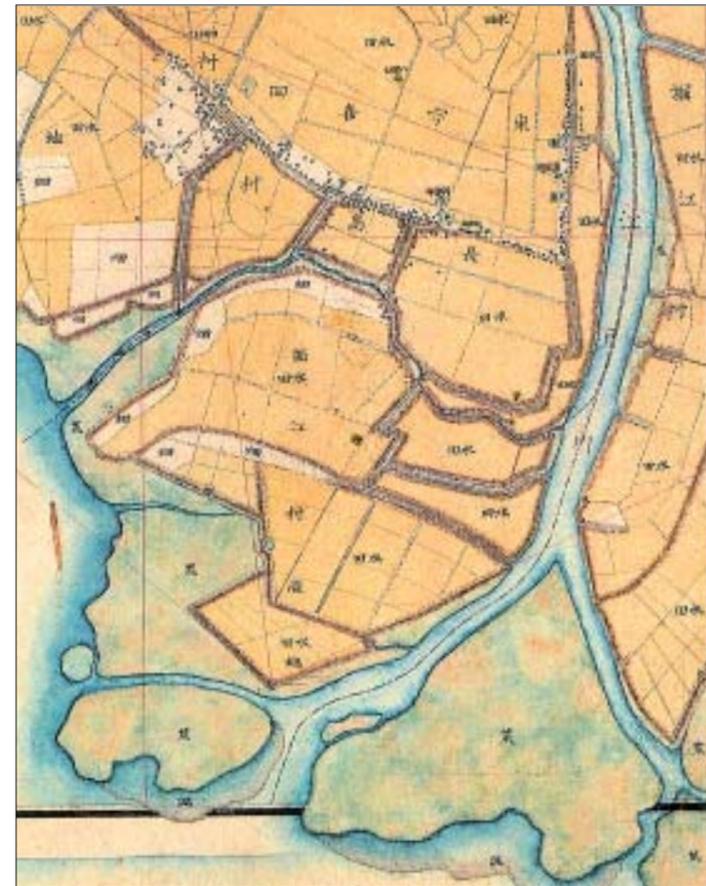
した。それが今では、お台場そのものが湾岸道路のかなり陸側に取り込まれた形となった。

2— 明治初期、国家経営への重要事業としての地図作成

図3は、日本で初めての広域的な実測地形図として、関東平野全域について作成された「2万分1迅速測図」の原因である。明治新政府は、明治10(1877)年の西南戦争など、各地で勃発した叛乱の鎮定に際して、地理不案内に加えて地図がなかったことから苦戦した。この経験から、陸軍卿山縣有朋は首都防衛のために地図作成を命じ、明治13年から着手された。制約のある予算のもとでの緊急の事業であったことから、三角測量を経ずに、現地で平板測量から始める迅速測図方式が採られた。明治13年時点において、この方法による全国測量には1000万円を要すと見積もられ、初年度には20万円(明治13年の国家歳出予算6300万円の1/300)が当てられて、同19年に全域の完成を見た。

後に、全国土を覆う地形図は5万分1とされたが、創成期における政府は、「地図ハ国家経営ノ用具ニシテ独リ陸軍一部ノ用ニ偏スルモノニ非ス…」として、近代国家の経営に詳しい地図は必須のものと考えたようである。

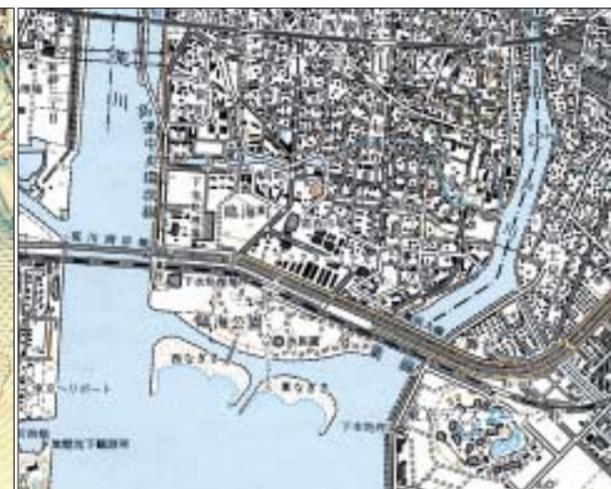
測量(測図)原因では、等高線表現に加えて、彩色と文字によって地形と植生を表わしている。このことによって、土地利用形態がそのまま土地の地形的条件を反映していた時代の状況が判り易く示されている。さらに言えば、大規模な土地



■図3—江戸川河口の迅速測図原因(参謀本部陸軍部測量局、1880;国土地理院所蔵)、×0.8
江戸川下流の分流部の先にある「荒地」辺りが、現在の東京ディズニーランドに相当する。図の下は、原図の余白に添えられた「視図」で、河口の砂州を隔てて望む房総の山々



■図4—5万分1地形図「東京南東部」(1916年修正、陸地測量部)、×0.8
典型的な三角洲に立地した農村風景で、海岸線の前面1.5kmまでは広大な隠顕砂洲が広がる

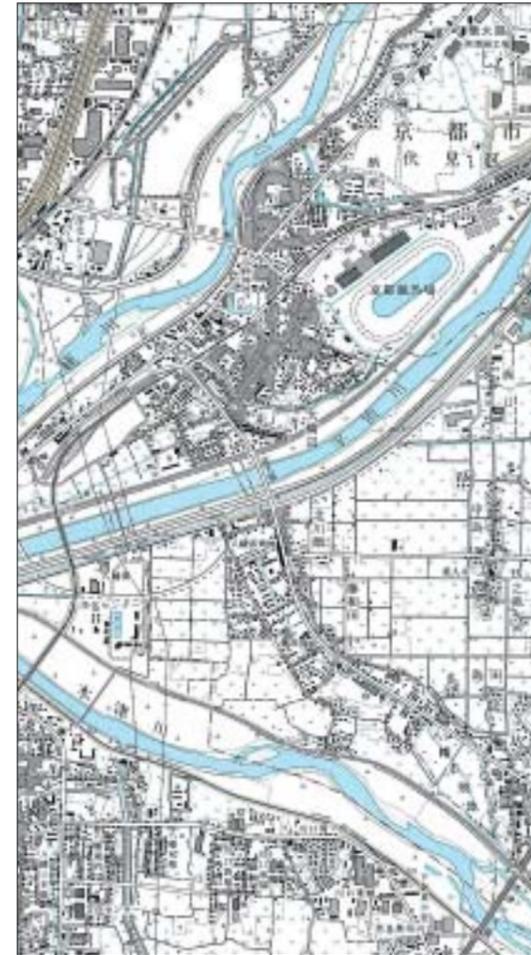


■図5—同左(2002年修正、国土地理院)、×0.8
景観が一変した現在の同一場所。図を慎重に読めば、往時の道や河川をたどることが出来る



■図6—2万分1仮製地形図「淀」(1890年測量,陸地測量部)、×0.55
桂川・宇治川・木津川の合流部 中央の旧河道は、1885(明治18)年大洪水で流路を変える前の木津川 右に見える沼沢地は巨椋池に続く 豊臣秀吉が築いた淀城(中央やや上)は、天然の要害を利用していることが判る

■図7—2万分1正式地形図「淀」(1909年測図,陸地測量部)、×0.55
直轄河川事業は、結果として、三川の合流点を下流に移した工事となり、大きな遊水池機能を持っていた巨椋池を、新宇治川の高堤防で遮断することから始まった



■図8—2.5万分1地形図「淀」(2001年修正,国土地理院)、×0.69
三川合流地の現在 淀城の遺構は与野(よど)神社としてかろうじて残る 図の東の小椋池に続く土地は、低湿なために、古くからの集落を除けば水田のまま

の改変や都市化が進行する以前の、明治前期における関東平野全域の状況を知ることのできる唯一の地理史料である。原図の余白には、「視図」として、目標地点などの見取り図が添えられている。これらは江戸時代の面影をいまだに色濃く残していた明治初期の景観を描写したものととして貴重である。図3の下端にその例を示したが、図では、のどかに水路が連なる江戸川下流域から、海を隔てて遙かに望む房総の山々が描かれている。水は豊かに澄み、山野は緑にあふれていた時代の景観がしのばれる。

3—河川事業から見た初期の地形図

明治政府は、富国強兵・殖産興業を国是とした。いまだ鉄道輸送が未発達であった状況下で、江戸時代以来の最大の輸送幹線である内陸舟運の維持と、農業生産の拡大・安定のための水利施設の整備が急務とされた。このため、大きな洪水が頻発したにもかかわらず、政府の財政措置は高水工事に対しては消極的にならざるを得

なかった。また、低水工事には上流部の砂防対策が一体・不可欠として、大規模な直轄砂防工事も着手された。

一方、明治25(1892)年に制定された鉄道敷設法によって鉄道輸送網が急速に整備されるにつれて、内陸舟運への依存度は低下し、航路維持を目的とした低水工事の意義は次第に薄れた。また、明治前期に相次いだ洪水被害の中で、帝国議会において治水事業の促進が急務とされ、明治29(1896)年には河川法が制定されて高水工事に対しての国庫負担の途が開かれ、洪水防御を目的とした大規模な治水事業が進められた。

図6～8に紹介した地形図は、この間の変遷を見事に写している。

図6は、前述した関東平野の迅速測図から少し遅れて、京阪神地方において作成された「仮製地形図」(明治17～23年)である。この時代の地形図は、河川の高水工事に伴う河道の拡幅や流路の変更、大規模な堤防築造が始められる以前において、江戸時代以来の河川および

その周辺の状況を精確に表現している唯一の広域的な地理史料である。図は、明治23(1890)年測量で、図の中央部に見えるのは豊臣秀吉が築いた淀城の遺構であり、大坂からここまでの淀川を船が廻り、物資の集散で栄えていた様子がしのばれる。また、その周辺は三河川と巨椋池に続く沼沢地が囲み、天然の要害であったこともよく判る。なお、この地図が測量される5年前の明治18年大洪水(枚方市から下流の一带が水没)の際に、木津川では河道が移ってしまったが、地形図にはその旧河道の状況がよく表れている。

この洪水が契機となって決定された「淀川改良工事計画」においては、琵琶湖から流下する瀬田川に堰を設けて琵琶湖に洪水調整機能をもたせるとともに、下流での洪水流下をよくするために河川の拡幅と直線化が図られた。往古以来、天然の巨大な洪水調整機能を担っていた巨椋池は高い堤防によって河川から遮断され、折からの殖産興業政策のもとで、水田化のための干拓が進めら

ることとなった。

ところで、この一帯には、条里制の地割りがかなり残っている。図に見える碁盤目状の道路網の断片がそれであり、その面影をしのぶことができるほか、「八幡荘」などの地名も見られる。また、淀城の北の「淀納所町」には、秀吉の時代に徴税機能を持った役所があったことを伺わせる。木津川旧河道の岸には、「宇北川岸」があるが、これは、江戸時代を通じて舟運による物資の集散で賑わっていた土地なのであろう。このように、地形図に残された地名から、往時の歴史を伺うこともできる。

図7は、迅速・仮製の地形図を追って、全国の主な地域について正規の三角測量に基づいて作成され始めた正式地形図であるが、河川事業に対する考え方の変遷を地図のうえでよく表している。大地を切り裂くように、見事に直線・捷水路化された新木津川と、前述のように、その高堤防によって巨椋池が分離された様子が明瞭である。京都大阪間の国道もこの治水方針の変更によって経路が変更されて、新設間もない区間でさえもう捨てられている。

図8はこの地域の現在の姿であり、河川の形状は、基本的には明治後期と同じである。なお、地形図を仔細に見れば、往時の道路や集落の姿が読みとれる。

4—あとがき

明治初期以降はや130余年。世界に類を見ないような目まぐるしさで変貌を遂げた日本において、ここで紹介したような古い地形図は、大規模な改変が進められる以前の国土とその景観を忠実に写したものであるがゆえに、当時の地理的事情とその時系列的变化を知るためには不可欠のものである。

地図は様々なことを我々に語りかけ、地図を通して日本が歩んできたみちを伺うことが出来る。一方では、現在は均質に見える市街地であっても、古い地形図に描かれた過去の地形条件の差異から、それが反映されている地盤の良否などを知る貴重な資料でもある。

地図を前に、のどかであった日本の山野や、土地の大改変の進行・人口の集中で活況を呈していた時代の有様などに想いを巡らすとき、1枚の地図は様々な楽しみを与えてくれる。地図を通して、時代やその当時の人々の有様が思い浮かぶ。いや、ただ眺めているだけで楽しくなってくる。それが地図である。

(参考文献)
1) 同史編集委員会編：『測量・地図百年史』、国土地理院(1970)
2) 建設省近畿地方建設局編：『淀川百年史』、同局(1974)
3) 長岡正利(1991)：明治前期の手書彩色関東実測図—迅速測図原図解題—。『国土地理院時報』、No.74
4) 琵琶湖淀川水政整備：『治水 その思想』、サンライズ出版(2004)